

よろずは

平成二八年
八月号

万葉歌と季節の植物4

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも

(巻四・四九六)柿本人麻呂

み熊野の浦の浜木綿のように幾重にも心に恋しつつ、じかに逢うことのかなわぬことよ。

今回は、白い花がひときわ目立つ、浜木綿の花をご紹介します。

浜木綿が『万葉集』に詠まれるのは、右の一首だけです。浜木綿はハマオモトとも言い、その名は、花の形状が「木綿」に似ていることに由来するものとも言われています。「木綿」は、現在の布のもめんではなく、幣などにする、植物の繊維のことを指すとされています。

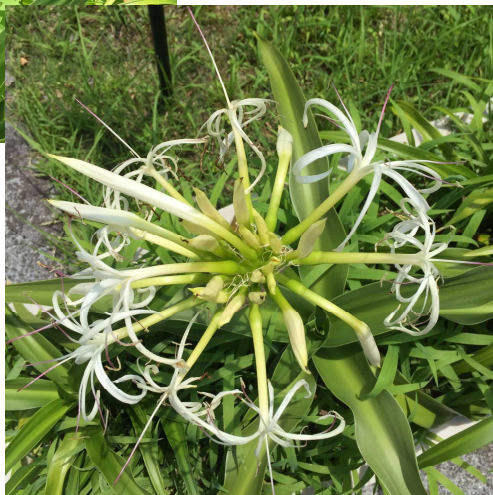
この浜木綿が「百重なす」の序詞になる理由には諸説あります。一つには、浜木綿の花や葉が重なっている様子から導かれたという説、二つには、浜木綿は海岸の砂地に群生する性格を持つため、その様子から導かれたという説です。現在でも、和歌山県には浜木綿の群生地があり、当時も名所として知られていたのかもしれない。歌に「み熊野の浦の」とあることから、作者が実際に熊野の浦（海辺や入り江）を旅する中で、目にした風景から呼び起こされた表現とも考えられます。白く繊細な造りの花に導かれて、遠く離れた恋人はどのように思い起こされたのでしょうか。

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

※「万葉歌と季節の植物」では、万葉文化館の万葉庭園にある植物を中心に、季節の万葉歌をご紹介します。

【浜木綿・はまゆづり】

当館の建物入り口左脇にて撮影（7月5日）。プランターに植えていますが、大きな花が咲きました。7月中旬が見頃です。



【万葉古代学係】